

# JSIR NEWS LETTER

国際リハビリテーション研究会

## 巻頭言

### 『デジタル・テクノロジーと国際リハビリテーション』

国際リハビリテーション研究会 理事 松尾 英憲

2020年は私たちの社会の価値観や生活様式が大きく変化し、デジタルツールによる活動が一気に普及しました。ヘルスケアの分野でも、さまざまな進化が加速していることを実感しています。昨年12月に参加した日経ヘルステックサミットでは、先進的な取り組みを行っている民間企業、医療機関など多くの先行事例を知ることができました（全セッションの様子がアーカイブ動画で視聴できます(\*1)）。途上国向けヘルステックのセッションでは、①ヘルスケアに関する規制の厳しくない環境で、むしろ途上国のほうが技術の開発・実証がしやすい、②新型コロナウイルス感染症により物理的距離を取る必要が生まれた結果、オンライン診療など新しいビジネス領域が成長しており、途上国の課題解決に大きく貢献できる可能性がある、といった議論がなされていました。近年、遠隔リハビリなどの取り組みも進んできており、こうした技術が途上国の脆弱層に届くことで、ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ（UHC）の実現に近づくのではないかとこの可能性を感じました。

昨年末のLANCET論文(\*2)では、世界の24億人以上がリハビリテーションサービスへのニーズがあると示されました。国境を超えるリハビリテーションの重要性はますます高まっているといえます。こんな時代だからこそ、逆境をチャンスにできる2021年にしたいと思っています。

\*1: <https://www.healthtechsum.jp/>

\*2: [https://www.thelancet.com/journals/lancet/article/PIIS0140-6736\(20\)32340-](https://www.thelancet.com/journals/lancet/article/PIIS0140-6736(20)32340-0/fulltext?fbclid=IwAR20ZHfr_57POCotwkE-lvTemoCx00P4HSZyKl25luM2w3YFkQe6Lnu33qs)

[0/fulltext?fbclid=IwAR20ZHfr\\_57POCotwkE-lvTemoCx00P4HSZyKl25luM2w3YFkQe6Lnu33qs](https://www.thelancet.com/journals/lancet/article/PIIS0140-6736(20)32340-0/fulltext?fbclid=IwAR20ZHfr_57POCotwkE-lvTemoCx00P4HSZyKl25luM2w3YFkQe6Lnu33qs)

## 【特集】 国際リハビリテーション研究会 第4回学術大会 ～ニューノーマルと国際リハビリテーション～



2020年11月8日(日)  
オンラインで開催しました

COVID-19のパンデミック以降、ポストコロナやウィズコロナといった新しい時代の到来を示すかのような言葉がよく聞かれる。ニューノーマルという言葉もそれ自体は世界恐慌以来使われているが、ことさらにCOVID-19との関連で語られるようになった。もしかすると、長らく世界は新しい時代の到来を待ちわびていて、今回のようなパンデミックにもその兆しを見ようとしているのかもしれない。確かに、外出自粛を契機として一挙に進んだオンライン会議のシステム、海外渡航禁止が逆に浮き彫りにしたグローバルセッションの究極的な進展など、時代の転換を感じさせられることは多かった。

一方、そのようなニューノーマルは国際リハビリテーションにどのような形で顕現するだろうか？国際リハビリテーションのニューノーマルとはどのような姿をしているのか？

今回の学術大会ではさまざまな角度から新しい時代の国際リハビリテーションの可能性を共有し検討したい。

大会長：河野 真（国際医療福祉大学成田保健医療学部）

## 第4回学術大会を振り返って ～準備委員の一員として～

勝田 茜（国際リハビリテーション研究会第4回学術大会実行委員、姫路獨協大学医療保健学部）

昨年の学術大会終了時では、初の福岡開催が予定されていた第4回学術大会でした。2020年に入りCOVID-19の影響により、徐々に人々の行動が制限され、4月には緊急事態宣言が出されました。その頃に、多くの人々は今後の見通しがつき難い状況であったと思います。福岡開催に向け準備委員も広田理事を中心に、どのように開催できるのかと検討を重ねました。せっかくの初の地方開催、1年延期をしておこなう実施を、、、とのことで、東京を中心としたオンライン開催になりました。オンラインでの学術大会の開催に向け、河野学会長のもと特別セッションの企画をいたしました。対面では参加し難い人が参加できる。そのオンラインの利点を最大に活かし、ドイツと繋げることを企画しました。特別セッションでは、ドイツ以外にもタイの現地とも繋ぎ、現状、取り組みのお話を聴く機会も得られました。海外からの講師を実現でき、意見交換できたことはオンラインならではのでした。その他にも一般セッションでは、11演題の発表や、適正技術や研究についての特別セッションなど、この研究会ならではの企画が実施されました。最後の特別セッションでは、「障害当事者による国際協力の現状」と題し、当事者の方から話題提供をいただきました。参加者43名の方々がそれぞれに貴重な時間を過ごすことが出来たのではないかと思います。

様々な可能性を新たに感じる事ができた第4回学術大会でした。しかし、オンラインの学会では、セッションの合間での立ち話や雑談などが難しく、寂しさも感じました。対面とオンラインの良いところを活かした、そんな素敵な学術大会が今後、開催できるようになればと思っています。第5回学術大会は福岡で開催が予定されています。初の地方大会が無事に開催でき、再び充実した時間を過ごすことを楽しみにしています。



## 「出会い」から始まるパートナーシップ ～話題提供者として～

曾田 夏記（自立生活センターSTEPえどがわ）

「障害当事者と、どのような連携が可能か？」というテーマを考えるべく、今回特別セッションで話題提供をさせて頂きました。冒頭の問いは、リハビリテーション業界・国際協力に関わらず、日本で障害者運動をしているとよく聞かれる質問です。

「障害者運動」の幅は、本来とても広いものだと思います。政府にロビーイングをするような「狭義」の障害者運動で捉えると、「一体どう連携し得るのか？」と頭を抱えてしまうかもしれません。でも、例えば私自身が河野先生・石井先生とつながり、国際医療福祉大学で毎年講義をさせて頂いただけのおかげで、学生の皆さんに当事者としての想いを伝えることができます。そこから介助者になってくれた学生さんもいます。ほんの少しだけ、社会が変わっているとしたら、それもひとつの「運動」だと私は思っています。

そして、その具体的な「連携」のタネは、「出会い」から始まるものだと思います。私自身も、「リハ職と国際協力でどう連携できる？」と聞かれても良いアイデアが浮かびませんが、「河野先生たちと何が一緒にできそう？」とか、「ゆっこさん（研究会メンバーの河村さん、私が愛する先輩隊員）と何が一緒にできそう？」などと聞いてもらえれば、ポンポン面白いアイデアが浮かびそうです。たぶん、皆さんも同じではないでしょうか。

JICA職員時代、私は日本の障害当事者と「出会う」機会が限られていました。でも障害当事者団体で活動するようになり、世界各国の障害者と出会うと欲しい日本人の当事者にたくさん出会えました。多くの「出会い」をプロデュースし、どこかの国の誰かの人生が変わるような、そんな機会を作っていけたらいいなと思っています。今回は貴重な機会をありがとうございました！

## 第4回学術大会に参加して ～発表者として～

濱田 光佑 (愛知医療学院短期大学リハビリテーション学科)

今回、国際リハビリテーション研究会第4回学術大会に参加し、「ホンジュラスのリハビリ専門職が認識する障害者の役割」というテーマで一般演題発表をさせていただきました。ホンジュラスは中米地域にある、日本ではあまり馴染みのない国ですが、リハビリテーション専門職のJOCV派遣歴は非常に長い国でもあります。その一方で、同国の障害者を取り巻く環境やリハビリテーションの状況は未だ多くの課題が山積しています。今回の私の発表を通し、本研究会の先生方にホンジュラスの医療、リハビリテーションの状況に興味を持っていただければ大変うれしく思います。

また、私は一般演題発表を含め、本学会に参加させて頂くのは初めて機会でした。さらに、Web会議ツールを使用した学術発表の経験も少なく、戸惑うこともありましたが、志しを同じくするリハビリテーション専門職の先生方から貴重な意見を頂くことができ、非常に有意義な大会となりました。

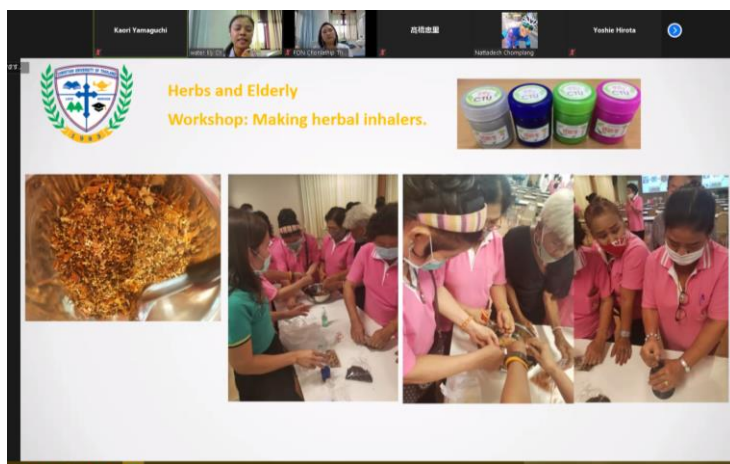
昨年から続くコロナ禍の影響もあり、国際リハビリテーション領域での調査、研究も滞ることも多いかと思えます。そのような環境下においても、状況の変化に適応する創意工夫を加え、私自身も継続して国際リハビリテーションに関わる様々な取り組みに挑戦していきたいと考えています。そして、取り組みの成果を本研究会や学術大会にて報告させて頂き、多くの同士の先生方と切磋琢磨していければと考えています。今回このような多くの学びを得ることができる貴重な機会を設けていただき、先生方には厚く感謝を申し上げます。今後は、この経験を活かし更なる国際リハビリテーション領域での活動に取り組んでいきたいと思えます。

## 「ニューノーマルがつなぐ未来」 ～参加者として～

三田村 徳 (東北医科薬科大学病院 リハビリテーション部)

今回、はじめて国際リハ学会へ参加させて頂きました。すべての演題がとても興味ある内容であり、他zoomセッションに参加できなかったことはとても残念でした。コロナ禍によりニューノーマルとしてのオンライン学会、そして新しい国際リハビリテーションのあり方を多様な視点から学ぶことができました。各国のリハビリテーション展開、これからの世界・日本の現状を踏まえ、現地だけではなく「いま」できることも含め様々な国際リハの側面や深みを知り、ディスカッションもできました。現場に行くことが難しい状況だからこそ継続的に国際活動をしていくことが本当に大変なことだと感じながら、参加された皆様の熱い思いや国内外から行動していることとしてとても参考になりました。参加者の意見・質問・アイデアも含め、さらに研究を重ね、協力し活動の幅を広げていると感じました。私自身、帰国後も国際分野へ関わりたいと少しずつ活動しており参加しましたが、一人一人が新しい認識と行動をしていかなければと思いました。

最後に、協力隊参加以前から「国際リハビリテーション学」を熟読し、実践できるよう現地にて活動してきました。学会後の懇親会においても著者らである河野先生や知協先生とお話をできたことは本当に貴重な時間で、思いを伝えることもでき感動しました。実際に会うことが難しいニューノーマルだからこそ、参加者同士も繋がることができました。国際リハ研究会の広がりや繋がりにより、世界の小さなコミュニティや一人でも多くの方に希望と未来が届くことを願います。ありがとうございました。



# [コラム] 大室和也の『世界のめがね』

大室 和也 (国際リハビリテーション研究会、認定NPO法人 AAR Japan [難民を助ける会])

事務局担当の大室理事は佐賀を拠点に世界中で活動を展開中です。このコラムではそんな大室理事のメガネを通した世界の姿を毎号お届けします。



バングラデシュのピリヤニ。食事現場の醍醐味。早く現場に行きたい (2020年2月撮影)

**【現場の重み】** 「ベトナムで理学療法を教えました」そう聞いたのは昨年末。埼玉にある大学がベトナムの大学と事業提携し、日本の大学からベトナムに教員を派遣していることを知りました。その事業が開始されたのは2016年。すでに4年も経っていましたが▼日本の技能実習生制度に関係する動きであるとしても、欧米地域ではなく東南アジアで日本人教員が勤務し始めているということに、単純に嬉しくなりました。リハビリテーションに関わる人が海外で活動するには、病院輸出の他、青年海外協力隊がほとんど唯一の頼みの綱であった状況が、変わってきたのだと▼COVID-19で思い知らされたように、世界のグローバル化は止まりませんが、人の往来はまだしにくい状況が続きます。そうであれば、海外にとどまって教え伝える人、研究する人、活動する人の重要性はますます高まるだろうと思います。それは「現場」を肌で感じたこのニュースレターの読者のみなさんであれば、理解されることではないでしょうか。今だからこそ、(安全に)現場で活動する計画を立ててみてはいかがでしょうか。

## 【お知らせ】

### 【国際リハビリテーション学第3巻を郵送しました】

2020年12月末に会員の皆様全員に「国際リハビリテーション学第3巻」を冊子体で郵送しました。ご覧ください。なお、未着の方は事務局までご連絡ください。

### 【登録情報に関するお願い】

会員登録をいただいた際の登録情報に変更はございませんでしょうか。変更のある方は事務局までご連絡ください。事務局連絡先: [jsir.office@gmail.com](mailto:jsir.office@gmail.com)

### 【年会費お支払いのお願い】

2020年度の年会費のお支払いがお済みでない方は、下記の口座まで年会費3000円のご入金をお願いいたします。  
銀行名: ゆうちょ銀行 口座名義: 国際リハビリテーション研究会 記号: 10540  
番号: 83410731 他金融機関から振り込む場合 店名: 0五八(ゼロゴハチ) 店番: 058  
預金種目: 普通預金 口座番号: 8341073 ※振込者名と会員名を同じにしてください。

## 編集後記

特集中の「研究会のメンバーや〇〇先生と連携」とするとアイデアが浮かぶ、という内容が共感でき印象的でした。私は今回は短い大会参加でしたが、それでも得るものは多かったです。福岡大会も楽しみにしています。(古川雅一)

ニューノーマルとはなにか、そしてオンラインとリアル(現場)について考える日々が続いています。学会への参加とこの編集を通して、「今だからこそ大事にしたいものはなにか」がほんの少し垣間見えたような気がします。次号も楽しみです。そして、お楽しみに。(大西海斗)

## 事務局 編集担当

高橋 恵里 (東北福祉大学 健康科学部  
リハビリテーション学科)  
古川 雅一 (仙台医健・スポーツ&こども  
専門学校 理学療法科)  
大西 海斗 (びわこ学園医療福祉センター  
草津)  
山口 佳小里 (国際医療福祉大学 成田保健  
医療学部 作業療法学科)

【研究会FaceBook】 <https://www.facebook.com/pages/category/Nonprofit-Organization/国際リハビリテーション研究会-1951070205159667/>

【お問い合わせ】 国際リハビリテーション研究会事務局 [jsir.office@gmail.com](mailto:jsir.office@gmail.com)

